

エネルギービジネスと共に 世界の人々との出会いとつながり

長坂 勝雄 (高24回)

筆者は1973年大学2年時に経験した所謂第一次オイルショックを通じ、エネルギーリソースを保有しない国家におけるある意味での脆弱性に漠然たる危機感を抱いた。一方、当時社会問題となっていたエネルギーが人類にもたらす公害に対する関心も高く、この両側面の技術力を持った企業へ入社することになった。以降、四十年にわたり、世界各地における石油・ガス関連のプラント建設のビジネスに取り組んできた。ここではその中でも印象深かった3つの体験を紹介したい。

ナイジェリアで

「持続可能な開発」の原点学ぶ

アフリカの大陸ナイジェリアで大型の製油所の建設を完工したのは1981年であった。60万トンに及ぶ建設資材を船で輸送し、さらに1000kmの内陸輸送を行う

プラントは本来、その安全性が最も重要であるが、なんと我々の常識では計り知れない事柄が頻発し、その「当たり前は当たり前ではない」との意識をビジネスにおいて又、日常生活においてもその後持つに至ったのはこのナイジェリアでの体験が最初である。

一方、素朴な人柄と人懐こいナイジェリアの人々との交流。そして見たこともない大自然に触れた経験は非常に思い出に残る体験であった。この国の人々の協力がなくプロジェクトは成功しないと強く感じた。今日、常識となったサステナブル・デイバロプメント（持続可能な開発）の原点をこの国のプロジェクトを通じ学ぶことができた。

防弾チョッキ着用でイラク再訪

中東各国に於いては、数多くのプラント建設に携わり幾度となくこの地域の戦争に巻き込まれた。イラクでは80年代の前半に大型の製油所とガスプラントを完工したが、その後イラクによるクエート侵攻の余波で新規案件がキャンセルされたりした。そんなイラク南部バスラを2009年5月に二十数年振りに訪問する機会があった。それもヘルメットと防弾チョッキを着用して。バスラ地域で建設実績のある日本企業の代表者と在バグダッ



●ながさか・かつお
飯田東中出身。高校では陸上競技部。1976年慶應義塾大学法学部卒。同年千代田化工建設(株)に入社。主に海外営業に携わり代表取締役会長など歴任し2021年退職。その間、経団連サブサハラ地域委員長を務めた。

難工事であった。その後、同国内に工事、建設に関わる学校を設立し、若きナイジェリア人の技術者の育成を行った。

筆者がナイジェリア南部のワリという街に駐在したのはそんな時期であった。ワリ郊外にある石油化学工場における再生プロジェクト(リハビリテーション)への参加がその目的であった。筆者はその直前まで、米国のニューヨーク、ヒューストンに7年間駐在し、米国メジャーオイル系の顧客との付き合いをしてきた経験があるが、米国とナイジェリアとの様々な国情の格差には当然のことながら驚きの連続であった。



ナイジェリアのワリ製油所 (1988年当時)

ド日本大使館によるイラク訪問ミッションが構成され、このミッションの一員としてイラクの地を踏むことになった。イラク復興後の同国の再生を見据えての訪問であった。

当時は未だ英国軍がイラク南部を統治していたが、度重なるテロ攻撃が頻発していた時期で、バグダッド国際空港に到着後、日本大使館員から配られたのがヘルメットと防弾チョッキであった。筆者は未だイラクが安定していた80年代に何回となく同国を訪問していたが、まさに戦時下の国がいかに緊張状態にあるか降り立ったバグダッド国際空港から大使館までの移動中に思い知らされることになる。防弾化したジープが米国軍の先導で地雷を避けながら、ジグザグに走る車中でこれはとんでもない場所に来たと思わずにはいられなかった。

南部バスラまでは英国軍用の輸送機で移動し、現地では装甲車に乗って主に日本企業に馴染みのある拠点を回った。かつて我々も関わったガスプラントを訪問したが、長い年月に渡りメンテナンスもされていない状態で正に廃墟寸前の有様であった。

そのプラントを見学し終わり、後にする直前に現地のプラント従事者が筆者の腕を取って、筆者の会社の名前を呼び、「私はこのプラントの建設に関わった者だ」と



経団連サブサハラ委員長として安倍晋三首相に
提言書を手交（2019年4月、首相官邸）

日本国内をはじめ、世界各地に於ける様々なプロジェクトを通じて思うことがある。やはりビジネスは人と人とのつながり、関係、思いやりがその全てということだ。昨今の流れである「持続可能な開発目標」いわゆるSDGs。これを具体的概念として、そして言葉として初めて教えてくれたのは30年前にオランダ系石油会社のある幹部であった。地球温暖化という概念と共に、この地球上に人間が生き残るためには持続可能な開発目標を持つことにあると、そ

場。冬場は一日中真つ暗闇、逆に夏場は一日中明るいということになる。特に零下30度に達する冬は一日中真つ暗の中での工事となり、精神的にも厳しく今でもそこで頑張ってくれた関係者には本当に頭が下がる思いである。場所柄現地は永久凍土でプラントもその上に立つことになる。



カタールのアルサダ・エネルギー相と記念
写真に納まる（2016年5月、カタール・ドーハのエネルギー省会議室）

言い、「どうかここに帰ってきて、このプラントを直してくれ」と懇願された。長年の辛い時間を過ごしたイラクの人々の思いを改めて知り、思わず涙した。その後時間を置いて、この地域のプラント再生のプロジェクトに携わることになるが、残念ながら過激派組織による攻撃でまたしても中断し今日に至る。

中東では、今日も不幸な事態が続いており、世界中の人々が心を痛めている。一日も早く治安が戻り、この地に暮らす人々が安心して眠れる日々が来ることを祈念したい。

ロシア人の意外な勤勉性に驚く

今、世界からその動向が注目されているロシア。実はガスの生産量が世界第2位のエネルギー大国でもある。ロシアにも知人を持つ筆者としてはウクライナへの侵略以降何とも悲しい思いでこの国でのプロジェクトの事を思い出している。

思えばロシア国内での最後のプロジェクトとなったのが北極圏における（ヤマル）液化天然ガスプロジェクトである。その巨大さから、ヨーロッパ1社日本2社により構成されるジョイントベンチャー方式により、建設施工された。兎にも角にもロシアの北の果てに位置する現

余談だが、今後地球温暖化が進み、あの現場の水が解けたら一体あの巨大プラントはどうなるのだろうかと思ったりもする。さて、工事施工中に感じた事は地元ロシアの協力会社の人々の優秀さとその勤勉性である。意外といったら失礼になるが粘り強く仕事に取り組みロシアの人々には驚いた次第。今になって思うと現在あれだけの経済制裁下にあってもウクライナ侵攻を続けられるひとつの背景には、エネルギー大国を背景にしたロシア人の勤勉性にあるのではと思わずにはいられない。

工事は先ほど述べた北極圏の特異性から24時間シフトで進み、完工することができた。2017年12月現地ヤマルにおいて、製品の第一船が出港することになり、盛大な祝賀会が催された。プーチン大統領も出席し、テープカットがなされた。

後日談だが、この式典の終了後、空港の待合室で何時間経っても我々の帰りのフライトが飛ばず深夜まで空港

してその根底には人類が生き残るために誰一人取り残さない社会を作り上げる、という強い意志が必要だと、これも90年代に米国系石油会社の幹部から教えて頂いた。世界各地で出会った幾多の人々と時に励まし合い、時に議論し、時に口角泡を飛ばし、時に酒を酌み交わした日々。ナイジェリアで日々助けてくれたローカルスタッフ、イラクで出会った旧友、ロシアで励まし合った人々。これらの人々との付き合いが教えてくれたことこそ、持続可能な社会への思いではないか。

筆者は在職中、図らずも経団連のサブサハラ地域委員長の大役を仰せつかった。2019年に横浜で開催されたアフリカ開発会議（TICAD）における民間側の議長という稀有な経験もしたが、その会議中どの場面であつても忘れなかったのが前述のナイジェリアにおける体験であった。あの時、接しそこで感じた様々な人々の笑顔、怒り、涙、そして工事が完成しお互いに突き上げた拳、喜びの叫び声が会議に臨む私の脳裏にあつた。